

# いわて防災学教室

災害から学び、災害に備える



## 「手鞠」に込めた思い ～連載スタートにあたって～

岩手大学地域防災研究センター副センター長・岩手大学工学部准教授 越谷 信

岩手県をはじめとする地域の防災について、読者の理解を深めていただくことを目的に、「いわて防災学教室」の連載を始めることになった。この教室では、地震、津波、火山噴火、洪水、土砂災害といった様々な自然災害発生のメカニズム、対策、実例や現場のこぼれ話などを紹介していく予定である。執筆者は全員、岩手大学地域防災研究センターの所属である。連載初回にあたって同センターの紹介をさせていただきます。

同センターは、2007年2月に工学部附属センターとして発足し、当初のメンバーのほとんどは建設環境工学科(現、社会環境工学科)所属であった。センターの設立後、2008年には岩手宮城内陸地震があり、また、2010年にはチリ沖でのマグニチュード8.8の地震による津波が三陸沿岸に到達した。これらの地震や津波について、センターとして被害調査や防災意識調査に取り組んだが、活動の中心は個人個人の努力による研究活動や啓発活動が主体であった。2011年3月11日の東日本大震災の発生を受け、2012年4月に文部科学省に認可され、岩手大学としては初めての研究センターとして、大きく組織を改編して再出発した。メンバーも工学部のみならず、農学部、人文社会科学部、教育学部から防災や震災復興に貢献したいと考える教員を招き、相互の協力の下、文理融合型の組織になり、活動の範囲も大きく広がった。センターは現在3部門、自然災害解析部門、防災まちづくり部門、災害文化部門から構成される。今回の執筆者は全員、自然災害解析部門に所属している。

現在のセンター長は2代目で本紙でも連載を執筆していた南正昭 授であるが、初代のセンター長は

工学部附属センター時代から故堺茂樹前岩手大学であった。実はセンターのロゴマークのデザイン堺氏のアイデアによるものである。ロゴマークは赤、黄、緑の糸で編まれた手鞠を意匠化したもので、鞠を用いたのは、岩手県を中心に言い伝えられている座敷わらしを想起してもらうためである。敷わらしは、座敷や蔵に住む精霊的な存在で、家にいたずらを働いたり、家に富をもたらしたりするという話はよく知られているが、座敷わらしの口を詳しく調べた佐々木喜善によると、津波や洪水災害を知らせるといふ伝承もあるという。糸の色三色にしたのは、センターの活動により地域の防力が高まり、赤の危険な状態から黄の中間段階を経て緑のより安全な社会が構築されていくことを願ったものであり、それには3部門すべての力が必要という決意を示すためである。この決意を胸にセンター全員で岩手の防災力を高めていくべく、活動続けていきたいと思う。



地域防災研究センターのロゴマーク